

浄土

monthly JCDQ

6

2016
June



法然上人鑽仰会

貧乏董

磚

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

連載③



幅130ミリ、高さ65ミリ、奥行き105ミリ。長い時を経て焼けたような黒ずみがある。

瓦礫のようにしか見えないが、これはれっきとした骨董品である。三十年來の付き合いのある年上の骨董に詳しいKさんから、人を介していただいたものだ。受け取ったときに詳しい説明を聞きそびれてしまい、これがいったい何であるのか長い間不明だった。奈良時代あたりの瓦の残欠かとも思っていたのだが、それにしては施されている浮き彫りの絵に伸びやかさが無い。正面は堅苦しい抽象模様である。上部は黒く煤けているが、網目模様がある。では時代が下がって鎌倉あたりかと想像を楽しんでいた。

正体のわからぬままに、本棚のブックエンドとして使っていたのだが、先日Kさんの骨董についての著作を久しぶりに読み返していたら、この瓦礫の写真と紹介が載っていた。

この瓦礫は、漢の時代の玄室に使用されていた磚（古代の煉瓦）であるらしい。漢の成立は紀元前二〇六年である。それから四百年続くわけだから、およそ二千年前のものということになる。

中華人民共和国成立以降、中国の歴史的文化財は海外へ

の持ち出しを厳しく制限されている。この磚はおそらく、戦前もしくは戦中に、日本人が大陸から略奪に近いかたちで持ち出したものの一部なのだろう。

そのあたりのことについてKさんは著作で、同時に取り上げた楽浪磚について、次のように述べている（楽浪郡＝紀元前一〇八年～三二三年。朝鮮半島北部）。

「楽浪の磚が」 いったいどのような経緯をへてわたしの手元へ来たのかを考える。いづれ戦前か戦中の招来にはまちがいないだろう。願わくは、あまり不当な経路をへていないことが望ましいなどと、身勝手に甘い考えにふけったりもする。帝国主義といい、植民地主義といい、いずれにしてもこの国が犯した罪障を考えることなくこの磚を持っていたのは罰があたりたというものである」

一九一八年に発見された中国の天竜山石窟の石仏は、日本の古物商によつて頭や手足が削り取られ、国外に持ち出され、国内の博物館のみならず、欧米にも散逸している。これらの石仏を元の石窟にもどすことも、修復することもはや不可能である。歴史とはそうしたものであるという苦い認識はあるにせよ、それでもやりきれない思いにとらわれる。

ようやく、この瓦礫が約二千年前の漢の時代の磚であることが判明したわけだが、とりたててその扱いが変わったわけではない。本棚で、今も静かにブックエンドの役割を果たしている。

浄土

2016/6月号 目次

連載 法然上人のお言葉②③	梶村 昇 英訳 河西良治	2
法然上人と親鸞聖人(一)	林田康順	4
連載 響流十方	小村正孝	12
連載小説 渡辺海旭⑥⑨	前田和男	16
連載 江戸の川を歩く④	森 清鑑	22
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	28
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 表紙写真＝鬼海弘雄
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迎陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

学問ははじめてみたつるは、きわめて大事なり。師の説
を伝習はやすきなり。
(修学についての御物語)

現代語訳―学問は初めて見たてることが非常に大事である。師匠の説を伝え習
うことは易しいことである。

Honen Shonin's Sayings

In your learning, it is very important to manage to make a selection of your own for the first time. It is easy to inherit what you have been taught by your master. (A story about how to pursue the study of Buddhism)

解説

岡山駅から津山線に乗って1時間ほど北上しますと、誕生寺という駅に着きます。長承二年（一一三三）四月、法然はこの豪族の家に生まれましたが、9歳のとき、父が夜襲を受けて亡くなり、15歳で比叡山に上ります。そこで学んだものは、概念仏教といえるもので、仏教とは何かということを知ろうとするものでした。それまでの日本仏教がそうであったということでしょう。「智慧第一」といわれた俊才ですから、それは得意な分野といえるのですが、法然が求めている仏教ではありませんでした。法然は仏教というものをわが身に引き当てて考えたのだと思います。そして苦闘の末、法然仏教に邂逅し、京都に下りて浄土宗を開宗いたします。43歳の春のことです。まさに「初めて見たてた仏教」であったといえましょう。

Commentary

You get on a Tsuyama line at Okayama Station and, going up north, arrive at Tanjo-ji Station in about one hour. Honen was born in a powerful clan's house there in April, Chosho 2 (1133 AD). At the age of nine, he lost his father in a night raid. At the age of fifteen, he went up to Mt. Hiei. He learned what we would call conceptual Buddhism, trying to know what Buddhism was. This was probably a traditional Japanese way of studying Buddhism in those days. Considering that he was a genius called "the top rank of wisdom", he must have been good at such a traditional style of studying. However, that was not Buddhism which he tried to pursue. I think that he wanted to consider Buddhism in terms of his immediate personal concerns. After his painstaking effort, he ultimately attained his own Buddhism and came down to Kyoto to start the Sect of the Pure Land. It was in spring at the age of 43. It can be said that this was exactly "Buddhism that he himself managed to select for the first time".

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人と 親鸞聖人

新連載

—連載を始めるにあたって—

大正大学教授

林田康順

はじめに

この度、八十年以上の歴史と伝統を有する『浄土』誌上において「連載」法然上人と親鸞聖人を執筆する機会を与えられました。もとより浅学非才ではありますが、読者の方々に浄土宗祖法然上人のありがたくも尊い御教えの一端をお伝えすることができれば幸いです。『浄土』編集部の方から、こうした依頼を受けたのは、次のような経緯にあります。

これまで、生徒達が中学校や高校で学ぶ多くの教科書において、「親鸞聖人は、法然上人の教えを徹底した、発展させた」という一方的な記述が、長年にわたり放置され続けてきました。このことは、法然上人を宗祖にいたたく私達浄土宗徒にとっては、ただただ法然上人に申し訳なく、浄土宗祖師はもとより、全浄土宗寺院の歴代住職や先亡各位はもとより、現在も浄土宗寺院を支えて下さっている檀信徒の方々に顔向けできない状況が続いていたといっても過言ではありません。こうした教科書の説示は、たとえそれが一方的な記述であったとしても、文部科学省による検定を受けている以上、大多数の生徒にとって、半ば公的なもの、お墨付きを受けたものとして受けとめてしまうものです。しかし、改めて指摘するまでもなく、世界中の多くの方達が、それぞれの教義に基づいた信仰生活を日々送っている以上、各宗教や各宗派の地位は慎重かつ丁寧に取り扱われ、等しく尊重されなければなりません。無論それは、法然上人と親鸞聖人の関係においても、例外なくあてはめられます。すなわち、公教育の場においては、法然上人の教えも、親鸞聖人の教えも、共に百点満点の素晴らしい教えであり、徹底・不徹底、発展・未発展という枠で括ってしまうのは決して許されることではないのです。ですから、教科書の記述は「親鸞聖人

は、法然上人の教えを継承しつつも、独自の道を歩むこととなった」といった内容でなければなりません。

私は、こうした視点から、これまで四半世紀にわたり、繰り返し法然上人と親鸞聖人をめぐる発言を続けてきました。おかげさまで、私の思いを受けとめて下さる方々も増え、私の発言が浄土宗議会において質疑応答されたことを一つの契機として、多くの一般紙にも取り上げられ、広く社会の注目を集めることになりました。その結果、平成二十八年二月現在、高校倫理の教科書を発行している六社七冊の教科書の内、三社四冊の教科書において、これまでの「親鸞聖人は、法然上人の教えを徹底した」という一方的な記述が見直され、自主的に別の表現に改められたのは、誠にありがたいことでした。もちろん、道半ばですが、法然上人への報恩謝徳の万一に報いるためにも、これまで以上に精進を重ね、その輪を広げていきたいと考えています。そうした中、『浄土』編集部の方も、私の思いを汲んで下さり、法然・親鸞両祖師の教えを峻別するための学びの場を与えて下さったのです。そこで第一回目は、私がこうした思いを抱き、法然上人の教えを本格的に学ぶようになった経緯からお話しいたしましょう。

小学校時代の思い出

浄土宗寺院に生まれ育った私は、小学一年生から、夏休み期間中の四十日間、父と共に浄土宗日常勤行式を勤めるのが朝の日課でした。教えの意味など分からないままに「願我身淨如香炉… 南無阿弥陀仏…」とお経を読み、お念仏を称えていました。また神奈川県

内のお寺でしたので、やはり夏休み中の二泊三日、毎年、鎌倉にある浄土宗大本山光明寺で行われる夏期僧堂という研修に参加していました。海水浴やレクリエーションなど楽しい行事もありましたが、お経を練習する時間も長く、長い時間の正座でとても足が痛かったことを記憶しています。小学一年生の時、夏期僧堂終了後、時の大本山光明寺法主・石井真峯大僧正台下から得度を受けましたが、厳肅な儀式よりも、足の痛さばかりを思い出します。何とも情けない小学生時代を送った私ですが、それでも「阿弥陀さまは凄い仏さま、法然上人はとっても偉いお坊さん、お念仏は大切な修行」といった程度の認識は持つようになりました。

中学・高校時代の思い出

中学・高校は、浄土宗大本山増上寺旧境内地の岳蓮社に設立された芝学園に進学しました。その校歌の中に「三縁山内 伽藍の後ろ」という歌詞があり、中学一年の音楽の時間、三縁山とは増上寺のことと教わりました。遡れば芝学園は「浄土宗学東京支校」（明治二十年）、「第一教区宗学校」（同三十一年）を経て、明治三十九年に「芝中学校」として発足した学校です。芝学園では、学年毎に宗祖日という行事があり、毎年必ず一回は、増上寺で法話を聞く機会がありました。また四月の法然上人御忌に合わせて大宗祖日が学内の講堂で厳修されました。法要に際し、浄土宗寺院の子弟は、必ず献香・献灯・献花を担当し、法要後も、浄土宗寺院の子弟のみ、芝学園第三代校長・渡辺海旭先生の墓参のため、先生方と一緒に深川西光寺に参拝しました。そうしたことを繰り返すにつれて、「自

分は法然上人を宗祖とする浄土宗ととても深いご縁があるのだなあ」と少しずつ考えるようになってきました。

そんな多感な時でした、「法然上人の教えをさらに徹底したのが親鸞聖人である」という教科書の記述に遭遇することになったのは。受験勉強を通して、私が不本意ながら学ばなければいけなかった内容をかいつまんでまとめると、「法然上人はまだ半自力半他力だけれども、その教えを親鸞聖人が絶対他力まで高めた」あるいは「法然上人はまだ善人正機だけれども、その教えを親鸞聖人が悪人正機に進めた」あるいは「法然上人は〈行と信〉の二つを必要としたけれども、その教えを親鸞聖人が〈信〉のみに純化した」などといった物言いでした。とても複雑な思いになりましたが、友人や先生に伝えることもできず、一人悶々としていたのを記憶しています。今でこそ、こうした物言いは、俗説・誤解・誤謬・偏見に他ならないと確信を持つてお伝えすることができますが、中学生・高校生の私には、その解決の手だてさえ思いの及ばぬことでした。

大学時代の思い出

高校卒業後、慶応大学法学部法律学科に入学した私は、先生方から、実際の現場に各条文を適用するために必要な確で柔軟な判断力（リーガルマインド）の涵養を求められました。その精神は、結果として法然上人と親鸞聖人をめぐる教科書問題の解決に向けても大いに役立つことになりました。大学で学ぶ傍ら、私は、大学一年生から三年間、夏休み

になると浄土宗僧侶養成の道場である少僧都養成講座に入学し、浄土宗の教えを正式に学び、三年生の十二月には大本山増上寺で浄土宗僧侶としての入門的な資格を与えられた。とはいえ、私自身の理解力不足のため、高校時代の複雑な思いの根本的解決には辿り着きませんでした。

大学三年生から日本国憲法を専攻するゼミに入った私は、信教の自由と政教分離について詳しく学びました。今から三十年前は、大学キャンパスの至る所に創価学会や原理研究会発行のタブロイド判新聞がうずたかく積み重ねられる一方、『しんぶん赤旗』を皮切りに『文藝春秋』や『朝日ジャーナル』など、多くのマスコミが原理研究会などによる「靈感商法」批判の一大キャンペーンを張っており、宗教の隆盛が感じられると共に宗教への警戒や批判が渦巻く時代でした。私が入ったゼミには、無宗教を標榜する仲間が過半数いる一方、創価学会や統一教会、幸福の科学から理論右翼まで多様な信仰を背景とする友人も多く、毎週金曜日のゼミの後には、宗教をめぐる議論を夜遅くまで続けることも多くありました。宗教や信仰そのものに批判的な友人も多くいる一方で、創価学会の友人からは「浄土宗の教えは方等時に過ぎず、無間地獄に堕ちる」と非難され、幸福の科学の友人からは「法然上人といっても七次元の人だが、大川隆法師は十次元の方だ」と吐露されました。もちろん、私なりに精一杯応答はしたつもりです。物心つく頃から私は、ご本尊やご先祖をお守りしてくださる檀信徒の方々によってお寺が支えられているということを両親から重ねて言われていましたので、自分自身のアイデンティティーのためにも反駁をしていました。しかし、批判的な友人を納得させることができたとは、お世辞にも言うことはできませんでした。言うまでもなくその理由は、私自身の不勉強に由来するものでした。

その一方、彼等は実によくそれぞれの信仰する宗教・宗派の教えを学び、かつ、実践もしていました。ある時、創価学会の友人から「昨日はあまり勉強できなかったから、今日は二時間お題目を唱えてから勉強する」と言われたこともありました。

大正大学大学院へ

大学四年生となり、本格的に友人達が就職を考える頃になると、これまで縷々述べてきた、小学校以来の経緯を踏まえ、私は次のような思いに辿り着きました。「今の自分は、法然上人と親鸞聖人の教えをめぐる不透明な課題を明らかにすることさえ出来ず、自身の信仰を体系的に友人に伝えきることも叶わない。仮にこれまで希望していた職に就けたとしても、いずれ私は自坊に戻り、浄土宗僧侶として生涯を終えることになる。こうした状態のまま、一人の浄土宗僧侶として、一箇寺の住職として、ご本尊阿弥陀様に、宗祖法然上人に、歴代住職に、檀信徒の皆様に顔向けすることが出来るであろうか」と。はたして私は、大正大学大学院に進学し、法然上人の教えを自身の信仰と照らし合わせながら学ぶ浄土学を専攻することになったのです。

(続く)

昨年冬 季刊誌『法然思想』を創刊した
今 五木寛之も注目する真宗教学者

佐々木 正^師講演

法然^{上人}と親鸞^{聖人}

6 月 20 日(月曜)

午後 2 時から 3 時半

大本山増上寺(慈雲閣 1 階ホール)

一般 1,000 円 当会会員無料

佐々木 正 ささきただし

1945 年大分県生まれ、千葉大学卒業後地方公務員を経て 1991 年長野県塩尻市・真宗大谷派萬福寺前住職。

昨年東京で草愚舎主宰。著書に『親鸞始記』(筑摩書房)、『いまを生きるための歎異抄入門』(平凡社新書)、『親鸞再考』(法蔵館)、『法然の思想 親鸞の実現』(青土社)など多数。

問合せ先○法然上人鑽仰会

東京都港区芝公園四一七一四 明照会館四階 〒105-0011

メール hounen@jodo.ne.jp ファックス 03-3578-7036

如来今者、韋提希いだいけおよび未来世の一切衆生をして、西方極樂世界を觀ぜしめん。仏力ぶつりきをもつての故に、まさに、かの清淨国土しょうじょうこくどを見ることを得ること、明鏡みょうきやうを執つて、自ら面像を見るがごとくなるべし。かの国土の極妙の樂事を見て、心歡喜こころかんぎするが故に、時に応じてすなわち無生法忍むじやうぽうにんを得ん。

（仏說觀無量壽經）

仏たる私は今、汝、韋提希と未來世のあらゆる衆生に西方極樂世界が見えるように導こう。彼らは仏の目に見えない力によつて、まるで一点の曇りもない鏡で自らの顔を見るかのように、極樂という清らかな世界が見えるようになるのである。その世界の、えもいわれぬほど心地よくなる光景を目の当たりにすれば、必ず心のそこから歡喜が湧き起るので、その時には無生法忍という聖者の境地を得るであろう。

（参考＝浄土宗総合研究所編訳『現代語訳浄土三部經』）

「命と力ネ論」を超えるもの

医療の進歩はまさに長足の感がある。治療の方法・技術・機器などはもちろん、薬の開発・革新もめざましい。これまでは難病とされ、ほとんど治療の望みは持てなかった病をほぼ完治させる薬が出たという報道を聞く。完治は無理でも、現状維持、緩和、延命を可能にした、というケースもある。これを妙薬と言わずしてなんと言おう。患者さんにとっては一筋の光明どころではない。

ただし、問題がある。超高額ということだ。開発には膨大な費用がかかる。効果が立証され、製品化されても、難病の患者さんは相対的に少ないから、一般的な薬に比べれば需要は極度に少ない。当然、単価は跳ね上がる。それは市場原理というものであり、致し方ない。

たとえば——C型慢性肝炎の治療薬は12週の服用でほぼ完治するというが、500〜700万円。がんの新薬は1年で3500万円かかるという。もつとも費用の大部分は国の負担になっているそうだが、必然的に財政は圧迫されることになる。患者さんのことを考えれば、効能絶大な「妙薬」開発は大いに歓迎すべきであるのだが、こうした超高額薬品が出続ければ、薬費の補てんだけで日本財政が揺らぎかねないとの試算も出されているという。当然ながら国は製薬会社に価格を抑えるよう求める。が会社側は、その薬の開発費回収と次の

新薬開発費確保を理由に陣を張り、なかなか折り合いがつかないという。これも領けなくはない。

と、ここまで記せば、いずれ展開するのではと危惧されるのが費用対効果論というものである。相手は「命」という、客観的価値付けをすることなど本来は不可能なものである。しかし、あまりにも巨額なカネがかかるとなれば、それと人の命を比較しようとする論が出てきても不思議ではない。あらゆる分野においてロボット化を進めようとする（つまり、モノで人に代えようとする）世の風潮がそれを後押しし、人命にすら「評価額」をつけ、比較しようとすることにはならないか。それは極めて酷なことである。判ぜられる側ももちろんそうだが、その薬を投与するかしないかを判断する立場にある医師にとっても、病を治す、延命を可能に、というのは医療の目指すところだ。そしてそれは人類の素朴な願いでもある。両者はたしかに符号している。再び「しかし」、それはどこまで求め続けられるものなのだろうか。

ケンブリッジ大学研究員であるオーブリー・デ・グレイ氏は「老化は病であって、それを止める治療が可能」と主張。近い将来、老化を止めて今よりも格段の寿命を得られる、として研究を進めているらしい。理論的には「寿命

1000年も可能」としているとか、いないとか。

——昔、中国にひとりの修行僧がいた。難解な經典の注釈作業の道半ばで病に倒れてしまう。治癒後、作業を再開。が、命は有限であることを実感した僧は、まずは長生不死の身を手に入れることを思い立ち、『仙經』（長生不死を説く、道教の經典）によつて修行をする。あるとき、インドから来た僧と出会い、「汝は長生不死を求めているというが、やがては必ず死を迎え、結局は三界輪廻を免れない。仏教こそが生死を超える究極の教えである」と諭されて『觀無量壽經』を授かり、淨土往生の教えに帰依したという。——のちに中国淨土教の祖と讃えられる曇鸞（476・542）の逸話である。

命の価値などというものは、時代がどう変わろうともそれには左右されない、されてはならないもののはずであるが、今後、それを揺るがすようなことが起こらないとは誰も断言はできない。しかし、仏教こそは、それを超えさせてくれる示唆を数多く用意して門を開いてくれている。

寿命1000年を可能にする妙薬か……。筆者は、それが開発され普及する前にお迎えをいただけることを切に願っている。

（小村 正孝）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十九回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

仏教壁画切り取り男との出会い①



ロイマンの「弟子」から「共同研究者」へ

渡辺海旭は、畏友の東大教授・姉崎正治の仲介で、世界的大富豪のアルベール・カーンに援助を求めたがあえなく断われ、またまた帰国は遠のき、万事休すに立ち至った。

明治四十一年、ここ蘇城^{スイツウシヤウ}に留学して足かけ八年目の春のことであった。

五月にはロンドンに世界中から仏教徒と仏教研究者が集う初の万国仏教会議が開催され、日本からは姉崎も出席するというので、会うのを楽しみにしていたが、このままではいけそうもない。ならば、好きなビールで心の憂さをはらそうとしても、これまた手元不如意でままならない。

仏典をひもときながら、それに飽きると、素面で漢詩をものし、駄句をひねっては暇をつぶしながら鬱々として楽しめないうところへ、ロイマンから、自宅の会食に招かれた。

海旭は、夫人手作りの肉料理で久方ぶりに

腹を満たし、しばらくご無沙汰していたビールでぞんぶんに喉を潤して一息ついた。そこを見計らったように、ロイマンがいつになく遠慮がちな口ぶりで切り出した。

「カーン氏への私の口利きも、どうやら効果がなかったようだ。首尾よく博士号を取得した愛弟子に故国で錦を飾ってもらおうと期待していたのに、それがままならなくなり、師としてはまことに残念でならない」教授は空になった海旭の盃へ手ずからビールを注ぐと言葉をついだ。「で、ワタナベ、これからどうするつもりかね」

師の珍しい振る舞いに、海旭はいささか驚いて満たされた盃を押し戴いたが、そこへ夫人が割って入った。

「あらあら、あなた。ワタナベが帰国できなくなつて、実は、喜んでいらつしやるのじゃないの」

教授は一瞬たじろいで、言葉をにぎした。「な、なにをいう」

夫人は、「はつきりとご自身のお気持ちを
おっしゃいなさいな、あなた」と言つて夫を
促した。

ロイマンは、しばらく空をにらんでから、
言つた。

「どうかね、ワタナベ。私のそばでしばらく
……」

いきなりの提案に戸惑う海旭に、夫人が煮
え切らない夫の代弁を買つて出た。

「最近、ピツシエル先生がなくなられて、イ
ンド学の中心が先生のベルリン大学から主人
のストラスブルクへ移りそうだというので、
主人は大いに張り切っていることは、ワタナ
ベ、あなたもご存知よね。ロシアのオルデン
ブルク先生とイギリスのヘルンレ先生にお
願ひして、お二人のお国の探検隊が中央アジ
アからもつてきた仏教関連の「出土品」を主
人のところでまとめて研究するからと提案を
さしあげたら、旬日もしないうちに貴重な資
料が届くこと届くこと。主人は嬉しい反面、

自分ひとりではできないと、このところ頭
を抱えていたの。ああ、ワタナベが日本に帰
らなければいいのにと、独り言をいう始末な
の。そこへ運よく——」しかめ面をつくる夫
を軽く笑顔であしらうと続けた。「あら失礼、
不運にもだったわね、カーンさんの援助が頓
挫したでしょう。で、主人は内心では……」

ロイマンはわざとらしい咳払いをすると、
意を決したらしく、きつぱりとした口調で言
いきつた。

「そんなわけなので、ここは事情を察して、
私を助けてくれんか」と頭を下げると続けた。
「少なくとも一年は。もちろん、これまでの
ような無給の弟子ではない。大学ともかけ
あつて衣食に不自由はないほどの補償はす
るので」

「先生、わかりました。頭をお上げください。
私にとつても学問の研鑽に大いに資するので
すから、否やはありません。よろこんでお手
伝い致します」

夫人は食後のコーヒーをセットし終ると、その日の主題をこうしめたのだった。

「あなた、いいこと、アジアの探検隊の手土産の整理がひと段落ついたら、ワタナベをできるだけ早くお国へ帰してあげなさいな。日本には首を長くして待っている人がたくさんいるのだから」

ドイツのシルクロード探検隊の成果は〴〵宝の持ち腐れ々々？

その翌日から、ロイマンと海旭との間は、これまでの「師弟」を超えた、「共同研究者」のそれに変わった。二人は、ロシアとイギリスの探検隊が中央アジアから持ち帰った歴史的文献を優先順位をつけて腑分けし、それぞれが分担して、読み込みと漢訳仏典などとの比定に取り掛かった。海旭には独自の研究室が与えられ、そこへ日に何回となくロイマンが訪れては意見をかわすという日々が始まった。

そんななかで、海旭にとって、世紀を画する文献をもたらした歴史的人物に出会う好機が到来した。その人物とは、アルベルト・フォン・ル・コックという世界的な探検家兼研究者であるが、毀誉褒貶の多いこの男について詳しく述べる前に、まずは海旭と彼が出会うことになった経緯からご案内しよう。

ロイマンと海旭の手元には、異国であるロシアとイギリスの昵懇じっこんの学者からよせられた貴重な文献はあるのだが、なぜか肝心の母国ドイツのものがほとんどなかった。ドイツが探検隊を派遣していなかったからではない、世間的には、当時も（そして現在も）、イギリスの探検家のスタインばかりが有名だが、実はその「成果」においてはドイツも遜色はなかった。（とりわけ、新疆ウイグルはトルファン地区の石窟寺院群の発掘は、歴史に残る「文化事件」であった）。

そもそも列強による中央アジア探検は、植民地的な領土拡張野心を背景にもちながら、

折しも海旭がドイツに留学する一九〇〇年（明治三十三年）に始まった。

嚆矢はロシアで、それにイギリス、フランス、ドイツが続き、日本も大谷探検隊を送り込んだ。ドイツは都合四回探検隊を派遣、そのうち三回は海旭の滞独中の「国家的壮挙」であつた。ちなみに――

第一回は、一九〇二年十一月―〇三年二月でトルファンを調査。

第二回は、一九〇四年十一月―〇五年十二月でトルファンとコムルを調査。

第三回は、一九〇五年十二月―〇七年四月でシオルチュク、トルファン、コムルを調査。

それぞれ、隊長・副隊長は、ともに一級の研究者でもあるグリユンヴェーデルとル・コックがつとめたが、彼らが発掘して母国にもたらした貴重な歴史的文献は、大半は二人が席をおくベルリン民俗博物館に収蔵、さらに同館とも関係が深いベルリン大学のリヒャルト・ピツシエル博士のもとへも提供もされた。

ロイマン教授も弟子の海旭も、最新の貴重な到来資料を存分に活用できるベルリン大学を、遠く西のライン河畔から羨ましく眺めていたが、ピツシエルはともかく弟子たちの力量には疑問符を抱いていた。海旭は、「宝の持ち腐れ」ではないかとの思いから、日本の友人たちにこんな文章をしたためたものだった。

「ドイツの発掘調査は仏教壁画など古美術品も非常に立派なものがあるが、それよりも写経類でははるかにイギリスのスタイン氏を凌駕する立派な取得があつた」とした上で、次のように断じた。「古写経の方は、柏林大学教授ピツシエル博士が主任者で其門下の少壮ドクトル連が、時々有益な業績を主として普国学士会の公報に発表して居る。此中尤も珍しいのは雜阿含經の梵文（！）の断片だ。其他百藏經文の断片も夥しくある。（略）然しこれはどうしても満足な仏教教理の智識と聖典史に於ける該博の頭のあるものが居らぬ

と、良好の結果は挙げぬことは勿論だ。特に支那蔵経を縦横に読み得て、大体の旨を得て居る人でなければ、労苦多くして結果は甚だ少ないことだろうか。予の如きものは、殆ど言ふにも足らないが、目下恩師からピツシエル博士に交渉して居るから、旨く行けば或は出来るかもしれぬ。然し伯林大学は学術上のモンロー主義をきめ込むんで、居るのだから、贅をピツシエルの門に取ることとせば、材料はとても得ることは出来ぬかもしれぬ」

こう記して半ばあきらめていた海旭だったが、皮肉なことにピツシエルが急逝したことで、にわかに夢が叶いそうな気配になってきた。

仏教經典の比定作業が資料不足でしばしば行き詰まるたびに、ロイマン師が「ああ、ベルリン大学にある古葉を参照できれば……」と嘆くのを、海旭が見るにみかねて、「先生、今やインド学の泰斗を失った大学には、それ

らは無用の長物です。ベルリンに出向いて、借り受ける交渉してみたらどうでしょうか」と提案したのが引き金となったのだった。

ロイマンは、「そうか」と頷くと、しばし考え込んでから言った。「しかし、恩師がなくなっていまや宝の持ち腐れだから、こちらによしなさいといったら、かえって逆効果。弟子たちは頑なになって渡してはくれんだろう。さて、どうしたものか」

思案投げ首する教授に、海旭が知恵を出した。

「たしかに、正面玄関から行つては、かえって逆効果でしょう。ここは搦手です、搦手」首を傾げる教授に、海旭は一息入れてから、さる人物の名前を出したのだった。「ベルリン民俗博物館のアルベルト・フォン・ル・コック氏です。あの方から攻めてみたらどうでしょうか」

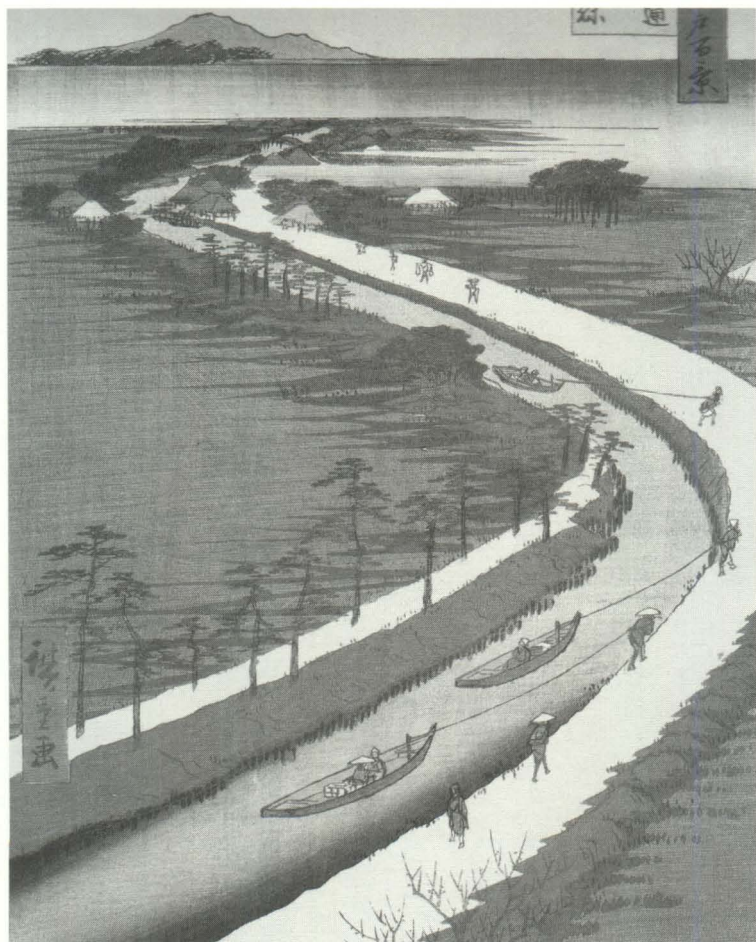
(つづく)

江戸の川
を歩く

第四回

江戸ウォーカ―

森清鑑



◆広重「四ツ木通用水曳き舟」

船と河岸

江戸は瞬く間に百万都市となる。江戸城を中心に無数に織りなす河川。単に人口数で言えば、世界一の大都市である。これらの人々の生活を賄う、食料、物資を配給する、最大の輸送手段が河川であった。

江戸名所図会の日本橋。橋の下を、無数とも言える船が走っている。ひしめき合っている感じ。多くは荷を積んだ高瀬船、茶船だが、客を乗せた屋形船、猪牙船も混じっている。大半は、城に近い一石橋方向に向かっているが、そこかしこに在る河岸に横付けせんとする船も在る。魚河岸に着いた船から魚介類を下ろし、栈橋の上で運ぶ人達。

まさに船の文化である。まず、大坂（阪）、紀州、尾張など遠方からの海上輸送では、大型帆船のいわゆる千石船、菱垣廻船（弁才船）が活躍。河川舟運としては、中型船、小型船が使われた。中型船の代表例としては、平田船（修羅船）、五大力船などで、主として利根川とか荒川水系の大きな主要河川で運搬に活躍。例えば、利根川関宿（野田）から江戸川を下り、

中川船番所まで年貢米などを運ぶとか、川越と江戸へ、物資を運ぶなどで運用。あるいは、江戸近郊の相模、安房、伊豆などから、大川（隅田川）などの主要河川に入るなどにも使われている。屋形舟は、中型船に入る。今日でもお馴染みの屋根付き遊覧船で、数は少ないが、町人だけでなく、大名、武家も使用。単に屋根船とも称した。

活躍する小型船

しかし、何といっても江戸の中心部、堀を含めた複雑な掘削河川で活躍したのは、小型船の高瀬舟、茶舟などで、高瀬舟は、いかなる高瀬（浅瀬）でも通れるように底を平たくし頑丈に造られている。森鴎外の小説にも登場する。これらの小型船は、全国の半分に相当する一万隻近い数の舟が江戸市中で動いていたという。小型船といっても、用途別に荷足船、釣船、漁船、伝馬船（舁船、本船と岸を往復）、肥船、猪牙船といろいろある。荷足船は、少人数の客や荷物を運送する小舟で米百二十石まで積めたという。茶船はこれら小船の総称のようなもので、荷物、人輸送の他、飲食物



を売る、俗称うろうろ舟としても使われたので、ついた名称。

猪牙舟は、池波正太郎の「鬼平犯科帳」、「剣客商売」、落語の「船徳」などでお馴染みの江戸っ子の足、川のタクシーであった。先端が尖っている快速艇で、結構揺れが激しかった。「猪牙でせつせと行くのは深川通い」、「柳橋から舟はゆらゆら波まかせ、舟から上がって土手八丁。吉原へご案内」などの俗曲は、猪牙に乗って、遊里へ赴く江戸っ子の姿を唄っている。

この他に、特殊な用途の船がある。水舟、湯舟などである。水舟は、上水の余り水や掘り抜き井戸の水を売り回る専用船。上水の恩恵が受けられない、深川、亀戸では特に珍重された。

湯船は、船に浴室を据え、湯銭を取って、入浴させる風呂船で水辺に暮らす人達が重宝した。浴槽をゆぶね、というのはここからきた。

曳き舟は、川に舟を浮かべ、人が川沿いを歩いて、綱で引つ張る。この方法は、特に川幅の狭い上流か運河で使われた。広重の「四ツ木通用水曳き舟」は有名。東武伊勢佐木線の曳舟駅は、その名の起こり。小舟に

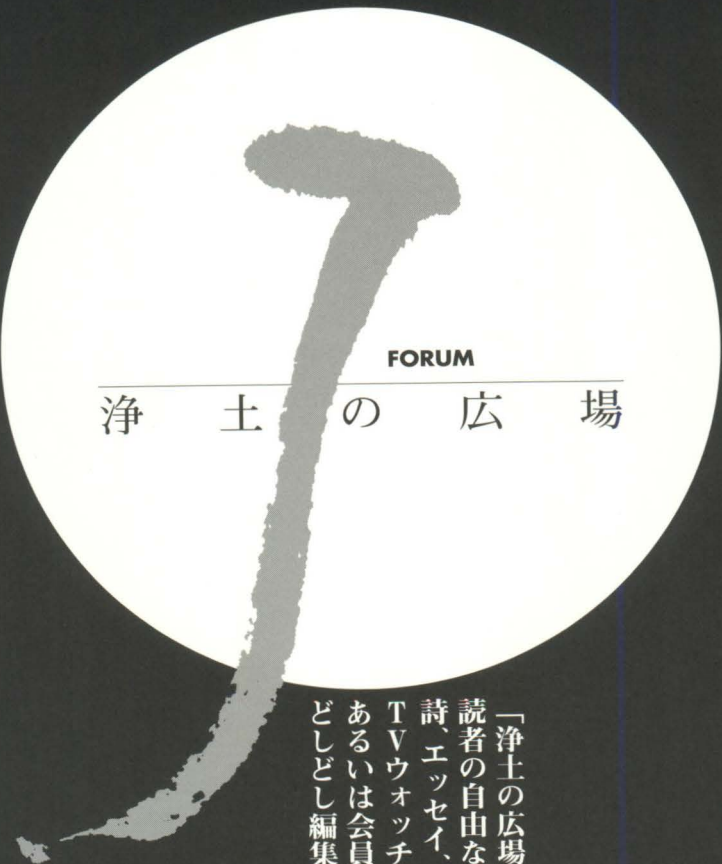
二人ずつ乗って曳かれている。

流通の拠点、河岸

河岸とは、船着場のこと。荷物や人を下ろす場所。大半は、簡素な船着場だが、なかには倉庫が林立し、流通センターとなっている場合もある（日本橋川、西河岸）。魚河岸や鎌倉河岸のように大きな市場に発展し、最早、地名と化している場合もある。

江戸市中、河川図に主な河岸をマーク記入すると、その多さに気づく。なんとその数の多いこと。正確には、江戸中心部と深川で百四十一ある。河岸とは、町民用の船着場のことをいう。それに対して、大名、武家の船着場は、物揚場と称し、区別されていた。これも当然、相当数あったから、正に船着場だらけと言って良い。これこそ、江戸の物流の原点であり、運搬路として市中の河川がいかに利用されていたかを物語るものである。河岸、物揚場は、江戸の経済活況の元であった。

【参考文献】
鈴木理生著「江戸・東京の川と水辺の辞典」（柏書房）、「江戸の川東京の川」（井上書院）など。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●日常

〔特選〕 日常に昏き場所あり目刺炙る

小林 苑を

今月は二題とも、俳句の題としては人泣かせともいべきものだった。この句「昏き場所」は、家庭に置こうが働く場所に置こうが、読み手に任されている。考えてみれば人間どこかに昏い場所があるものである。

〔佳作〕 夜半の春たばこ一本という日常

金井 楨

日常を重ねて倦みて春暮れる

大河内奈都子

日常は平温な妻花の下

井村 善也

●捨て身

〔特選〕 ヤドカリの引越しなべて捨て身なり

笠井 亜子

巻き貝の中で、やどかりは自分で貝を作らない。成長するに従って、少し大きい貝殻を見つけては移り住む。だから「やどかり」で

ある。目を移る時はまさに裸なのだ。「なり」
は「なる」かも知れない。

〔佳作〕尾を切られ捨て身で逃げる大蜥蜴 浜口 佳春

身を捨てし僧衣のくらし芥子の花 増田 信子

戸の外に出るは捨て身か花粉症 池田 伊吹

●自由題

〔特選〕桜並木抜けて駐在所は無入

伊藤あかり

ソメイヨシノの並木は時が経つとアーチ状
のトンネルの様相を呈する。抜けるという表
現がびつたりである。ぼつんと駐在所があり
たまたま無人であった。桜の持つ霊力の一
なものや無常観をふと感じさせる。

〔佳作〕石楠花やぬつと出てくる太き猫 水野あゆみ

すがる虹終日揺れる藤の花 石原 新

遠方のさくらばかりが揺れており 長谷川 裕



調布自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会（編集部選）

■日常

日常に象の尻ある臚かな
俳句的日常として桜散る
日常が四月馬鹿なり台東区
迷い来て蛇の日常非日常
岩場に日常あり磯巾着の開閉
日常の手馴れし捌き鰯干物
日常よ夫の言い訳青葉木菟
日常の菌ぶらしの減り梅雨に入る
湯を沸かす日常路味噌など好み
たんぽぽの開く日常まつびるま
ひたひたと日常のある春の寺
風船の日常漠然たる不安

村田 篠
工藤 掉
内藤隼人
早野逸平
住吉美紀子
石原 新
金子ミサ子
増田信子
笠井亜子
長谷川裕
水野泰明
沖山 麗

締切・二〇一六年八月十日

発表・『浄土』二〇一六年七・八月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■捨て身

捨て身にも母にもなれず夕長し
亡き母に捨て身の供養続く我れ
戸の外へ出るは捨て身か花粉症
恋猫によぎる捨て身という言葉
清らかに花桃いつだって捨て身
花はその命のかたち捨て身なり
生まれ出て捨て身に浮いてしゃばん玉
陽炎へ捨て身のごとく消えにけり
牡丹雪ひとひらづつ捨て身かな
春眠のやがて捨て身となる身体

村田 篠
飯島英徳
池田伊吹
秋山亮作
今野愛美
八幡由紀子
仁科美咲
青木為則
西島由美
時山倫朗

■自由題

花冷えや毒婦の墓を二度拝む
花曇り墓地に人間猫その他
春や手をかざせば水の音が出る
夏蜜柑ひとつ灯して曇り空
満開の桜が静止しておりぬ
曇天のさくら見上げる口あける
小鳥来る午後の紅茶の角砂糖
藤棚にまだ藤のない曇り空
見せ合えばシニアのしるし種痘痕
臍曲げて己が道行く人多し

金井 横
小林苑を
大塚 愛
今野愛美
今川由布子
結城道彦
鳥羽 梓
村田 篠
友道和子
飯島英徳

131 かい目

さっちゃんはネッ

かまちのふしう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

五月蠅うるさいともう始まった夏の夜 岱潤

この四月から「障害者差別解消法」が施行された。実は「障害者権利条約」が二〇〇六年に国連総会で採択されたものの、日本の現行法とはかなりのギャップがあり、諸々の法律改正をして二〇一三年ようやく今回の「障害者差別解消法」が制定され、日本政府が権利条約を批准したのは二〇一四年、なんと世界で一四一番目の遅さだった。

そして二年の準備期間を持つて施行したはずなのに、各省庁や事業者への通知は今年の一月と、民間事業者が対応するには時間がなさ過ぎ、その具体的法律の

効能は未だ判然としない。政府のやる気のなさだけが浮き彫りになっていると言えそう。

この法律は、障害者の問題が今まで医療と福祉の問題だけだったものを、社会全体の問題としてとらえ直そうとした点にある。問題の解決を本人の努力としていたことから、社会のあり方の問題として、日本映画にも字幕を付けることなど、障害者が求めていること、必要なことに配慮することを行うことが求められ、しないことが差別になるとされる点に法律としての意味がある。障害の個々に対応した合理的配慮が求められているが、人としての問題は対応する我々の心を育て

る点にあるように思われる。「思いやりとやさしさ」を法律で強制しないと出来ないようでは困ったことで、この法律で社会が変わることによって、人間も変わってほしいと思ってしまった。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土 八十二巻六月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年五月二十日

発行 平成二十八年六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※ 消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものもいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。